

高知医科大学医学部附属病院における 過去10年間の看護研究の動向

看護部

○弘瀬 裕子・若狭 郁子・高橋 純子
宮井 千恵・坂東 才

1. はじめに

当院看護部教育委員会は、開院の翌年の昭和57年から毎年講演会・院内看護研究発表会を開催するなどの活動を行ってきた。看護研究については定期的に集録を作成しており、平成6年4月に第5号を発刊した。

また、委員会活動の一つとして、委員の能力啓発を目的として、毎年テーマを設定しグループもしくは全体で研修を実施してきた。

今回、開院後10年余りを経過して、私たちが行ってきた看護研究を評価・分析する時期にあると考え、看護研究集録に掲載されている過去10年間の看護研究のテーマを内藤の分類（改良型）を用いて分類し、当院で行われている研究の傾向を明らかにすることができたので報告する。

II 目的

1. 当院での過去10年間の看護研究の動向を知る。
2. 他施設と比較し当院の看護研究の傾向を知る。
3. 臨床看護婦が行う看護研究のテーマはどのような領域があるかを知る。

III 方法

1. 対象

昭和57年度から平成3年度までの高知医科大学医学部附属病院看護部看護研究集録に掲載された看護研究216件（院内発表・院外発表を含む）

2. 方法

- 1) 分類用具は、内藤の分類（改良型）（表1）を用いた。
- 2) 対象を、発表の年度別・機会別に①研究数、②テーマの分類を行った。

- 3) 対象を、部署別に①研究数、②テーマの分類を行った。ただし、今回の発表ではこの結果の詳細は省略する。
 - 4) 6群については最終産物を分類した。
 - 5) 機会別分類について、院内は院内のみで発表したものとし、院外は、院内発表後院外でも発表したものと、院外のみで発表したものを含めた。
3. 比較資料
- 1) 高知医科大学医学部附属病院：昭和57年～平成3年（1982年～1991年）
 - 2) 聖路加国際病院：昭和49年～昭和58年（1974年～1983年）
 - 3) 北海道大学医学部附属病院：昭和47年～昭和56年（1972年～1981年）

表1 内藤の分類（改良型）

-
- 1群：看護教育，制度に関するもの，新人オリエンテーション，卒後教育等の研究
 - 2群：管理に関する研究（看護業務，人員配置，労働条件，勤務者の生活環境，看護体制，看護添書の形式，看護計画の検討，パンフレット作成等）
 - 3群：心理，人間関係，患者と看護婦その他の人間関係，コミュニケーション等の研究
 - 4群：看護に必要な用具類の工夫
 - 5群：看護の本質，看護のあり方，専門職業，職業意識，看護の歴史的考察，倫理等の研究
 - 6群：看護の方法，検査，患者指導，対症看護，疾患看護等の研究
 - 7群：患者の衛生的研究，感染予防，器具の消毒等の研究
 - 8群：医療制度，福祉問題等の研究
 - 9群：その他，以上のいずれの群にも入らないもの
-

IV 結果及び考察

1. 年度別・機会別発表件数（表2）

昭和57年度は開院当初であり総件数16件と少ないが、院外への発表が院内発表を上回っている。この傾向は昭和61年度も同様である。その他の年度は総件数が20~25件で院内発表件数が院外発表件数より多い。

院内発表については、毎年各部署1題の発表を義務付けており、それに自主発表が加わり

多少の増減がある。院外発表件数は毎年10件前後あり大きな変動は見られない。これは、専門領域への定期的な発表によるものであると考えられる。

2. 内藤の分類による群別発表件数 (表2・図1)

6群145件 (67.1%) , 2群20件 (9.2%) , 3群15件 (6.9%) , 7群11件 (5.0%) , 4群と9群各10件 (4.6%) , 5群4件 (1.8%) , 1群1件 (0.4%) , 8群は0件であり,

表2 内藤の分類による件数 (年度別・発表の機会別)

群 年度	1 群		2 群		3 群		4 群		5 群		6 群		7 群		8 群		9 群		合 計	
	院内	院外	院内	院外	院内	院外	院内	院外	院内	院外	院内	院外	院内	院外	院内	院外	院内	院外	院内	院外
S 57			3								4	5 3						1	7	6 3
S 58			1	1	1						10	7 1							12	8 1
S 59				1	1	1					9	2 1					1	1	11	5 3
S 60		1		3	1		1				10	2 3	1	1					13	7 3
S 61				3			1	1			6	2 3	1	1					8	6 4
S 62			1				3				11	3 3		2 1					15	5 4
S 63			1		1	1					12							1	14	2 6
H 1				1	1	2	1				12	1 3		1			2	2	16	5 5
H 2			3		2	2	1	1	1		6	3 3					2		15	5 5
H 3			2					1	3		6	6 3	1						12	6 4
合計		1	11	9	7	6 2	7	3	4		86	31 28	3	5 3			5	3 2	123	55 38

(注) 院内：院内のみで発表した件数、院外の上段：院外のみで発表した件数、院外の下段：院内発表後、院外でも発表した件数

6群の看護の方法等に関する研究が圧倒的に多い。これは、直接看護業務に活かせる最も取り組みやすいと考えられる。創設期のことでもあり、日常業務に関して必要にせまられての研究であったとも言える。また、他の群と比較して看護学生の頃に学習するウエイトが大きく、私達の得意の分野であったことも影響していると考えられる。

次に2群の管理に関する研究が多い。これは、記録や業務改善への取り組みの結果である。8群の件数が0件というのは、臨床看護婦は医療制度や福祉等に関する知識が乏しく、また関心が薄いことが原因と考えられる。

他施設との比較（図1）では、聖路加国際病院は管理に関する研究が当院より多いが、2群と6群が大部分を占めている点は当院と似ている。北海道大学医学部附属病院は、2群・6群が他の2施設に比べ少なく、5群の看護の本質等の研究が多いことが特徴である。

発表年度別群別推移については、昭和57年から平成元年頃までは2群と6群で大半を占めていたが、平成2年頃から小数ながら他群へも分散を見せている。

これまでまったく取り組まれていなかった看護の本質・看護のあり方など5群の発表が目される。

看護婦の経験年数によっても、研究内容に違いが見られるのではないかと考えられる。実際、看護教育・制度（1群）、管理（2群）、看護の本質（5群）などは、ある程度の経験と知識がなければ取り組み難い内容である。

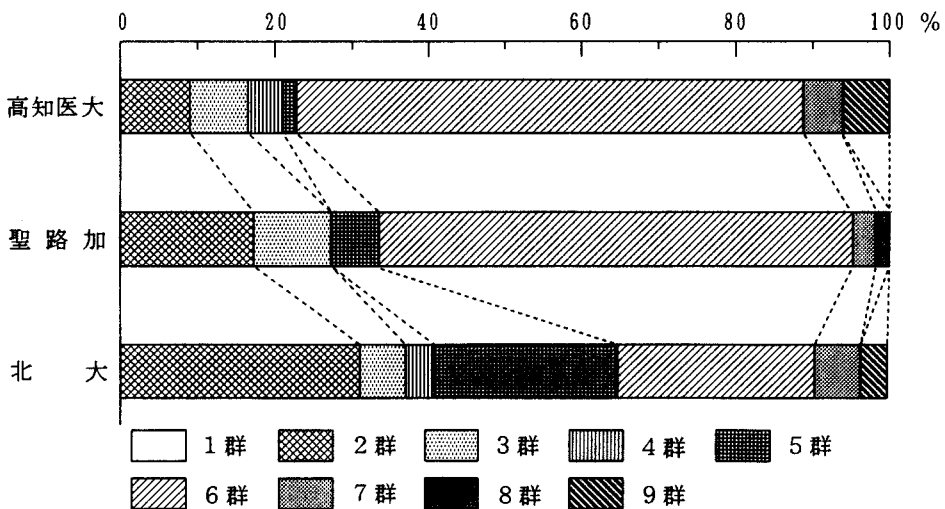


図1 内藤の分類による群別発表件数（過去10年間の比較）

3. 6群の最終産物について（表3・表4）

1) 6群の最終産物を分類した理由

(1) 全発表件数中6群に分類されるものが、145件（67.1%）と際立って多く、院内発表、院外の発表とも同様である。

(2) 他施設の結果と比較可能であった。

2) 最終産物別比較

当院で研究発表を行っているのは17部署で、病棟12部署、中央診療部門と管理部門5部署である。最終産物で最も多いのは、G（症例）で35.9%、続いてH（看護方法）16.6%、F（調査）14.5%、A（患者用パンフレット）11.0%である。

聖路加国際病院では、E（指導内容の作成）が最も多く26.2%、続いてH16.3%、F15.0%、A13.8%であり、Gは5.0%であった。

当院ではG、Hが1位、2位を占めているは病棟では症例が豊富であり取り組みやすく、また、日常の業務で問題を多く有しており解決の必要性があるなどが考えられる。

3) 最終産物（A～I）のバラツキについて

バラツキが少ない年は昭和61年度で、最終産物9項目中3項目への分散であり、Gへの偏向が大きかった。バラツキの多い年は平成3年度で、9項目中8項目へ分散しており、Gへの偏向はみられなかった。

4) 何かを作成していると言える内容（A～E）について

A～Eは145件中43件（29.6%）で、昭和61年度0件、平成2年度1件であったが、他の年度は概ね平均的な数となっている。

聖路加国際病院では、50件（62.5%）であった。

5) 発表の機会別による順位

院内・院外発表を問わず、いずれの機会もG（症例）が1位を占めている。C（手引き・要項の作成）、E（指導内容の作成）については院内のみの発表であり、A（患者用パンフレット作成）に関しては院内発表と院外発表とで差が見られ、16件中院外発表は3件と少ない。

表3 6群の最終産物

A：患者用パンフレット
B：患者用チェックリスト作成
C：手引き、要項の作成
D：基準の作成
E：指導内容の作成
F：調査
G：症例
H：看護方法
I：看護の評価

表4 第6群に分類された研究の最終産物

群 年度	A		B		C		D		E		F		G		H		I		合計	
	院内	院外	院内	院外	院内	院外	院内	院外	院内	院外	院内	院外	院内	院外	院内	院外	院内	院外	院内	院外
S 57	2		1								1	4							4	5
											2	1			1					3
S 58	1		2				1	1	1	2	1	5	2	1					10	7
											1	1								1
S 59	1		1				1	1				1	4						9	2
		1																		1
S 60	2		2				1	2			1	1			2				10	2
			1					2												3
S 61										2	3	2			1				6	2
											1	2								3
S 62	1	1						1	2		3	1	4	1					11	3
		1										2								3
S 63	3									3	5	1							12	5
										2	3	3								
H 1	2		1		3					3	3	1							12	1
											3									3
H 2								1			2	3	2	1	1	1			6	3
											1	2								3
H 3	1		1				1	1			1	1	1	2	1	1			6	6
										1	1	1		1						3
合計	13	1	6	2	3	4	2	7	11	4	21	18	18	3	3	1			86	31
		2		1			2			6	13	3	3		1					28

(注) 院内：院内のみで発表した件数，院外の上段：院外のみで発表した件数，院外の下段：院内発表後，院外でも発表した件数

V ま と め

1. 文献研究により，臨床看護婦が行う看護研究には内藤の分類1～9群があることを知った。また，6群について最終産物の内容を知った。
2. 当院の過去10年間の年間平均発表件数は，前期（昭和57～60年）19.7件，中期（昭和

61年から63年) 21.3件, 後期(平成元年~3年) 24.3件で, 徐々に増加しているものの著明な増加はない。また, 院外発表についても前期, 中期, 後期を通して年間平均9件から10.4件で変化が見られない。

3. 病棟と中央診療部門では, 研究の内容に若干の差がある。病棟は6群が多いのに対し, 中央診療部門は6群の他に7群, 2群の分野にも及んでいる。
4. 10年間を通し6群の看護の方法等に関する研究が全体の67.1%を占めている。
5. 他施設と比較して, 当院は6群に関する発表件数が多い。10年間平均して当院67.1%に対し, 聖路加国際病院では62.0%, 北海道大学医学部附属病院は26.7%であった。
6. 各群への分散状況は, 9群中3~6群への分散であり, 他の2施設と差は見られなかった。
7. 6群の看護の方法等に関する研究の中でも特にG(症例), H(看護方法)に関する内容が多い。Gは当院35.9%, 聖路加国際病院5.0%で, Hは当院16.6%, 聖路加国際病院16.3%であった。北海道大学医学部附属病院は比較資料がなかった。

VI おわりに

今回の研究では研究発表の内容・質についての分析は行っていないが, 開院から10年余を経過し, 蓄積された当院看護部の看護研究の傾向を知ることができた。次の機会には研究内容の継続性の有無, 研究結果の活用等, 更に踏み込んだ分析を行い, 今後の看護と看護研究の向上に役立てていきたい。

参考文献

- 1) 白倉佳子他: 1974年から1983年までの聖路加国際病院看護研究の分析——研究プロセスの評価——, 第16回日本看護学会集録, 看護管理, 1985.
- 2) 溝口シズエ他: 看護婦研修会の動向——10年間の研修テーマの分類を試みて——第16回日本看護学会集録, 看護管理, 1985.

(平成7年1月19日~20日, 岡山市にて開催の平成6年度日本看護協会)
中国四国地区看護研究学会で発表